

## 学内実習「発達援助実践」の教育効果に関する考察

小湊 博美, 脇園 幸恵, 山田 美幸, 山下 里奈, 有松 操

### 要 旨

1 年次生を対象に、入学後 2 か月経過した 6 月に最初の基礎看護学実習である発達援助実践を実施している。しかしながら今年は、新型コロナウイルス感染症発生に伴う緊急事態宣言を受けて、学内実習へ振り替えざるを得ない状況となった。

そこで、実習時期を 8 月に変更し、実習施設に赴くのではなく対象者を大学に招くという方法に替え、看護の対象である人間の理解と対象者の発達段階や生活に応じた関わりの理解を意図した 1 週間の学内実習を行った。

この学内実習を振り返ることによって、今年度の「発達援助実践」は、学生にどのような学びをもたらしたのか、教育内容を縮減することなく学びの保障につながっていたのかについて考察した。

学生の学びをみると、実習目標である 1) 看護の対象は健康を生きる人間であること、2) 人間の各ライフステージにおける特徴、4) 健康に影響を与える要因、5) 今後の講義・演習・実践に向けての対象理解、の 4 点については目標が到達できたと考えられる。しかし、目標 3) 対象者の生活と看護活動の実際を学ぶについては、健康レベルに応じた看護活動の実際やさまざまな看護活動の場の理解を深める体験は学内実習に組み込むことができず、今後の課題として残った。

**キーワード：**発達援助実践、学内実習、教育効果、看護の対象、発達段階

### 問題と目的

看護基礎教育における臨地実習は、学内で学んだ理論や方法を臨床場面において体験させ、人間を対象とする看護の実践に必要な知識、技術、態度を修得させる場として重要な位置を占める。さらに臨地実習は、「力動性のある現場」と「変化している対象の存在」という点から学内演習とは代置不能であり、学生にとって自己の再検討や現実吟味を行う機会となり、看護を深めていくためには不可欠な授業の一つである。

早期から看護が展開される状況に身を置く体験は、学習へのモチベーションを高める、看護学生としての自覚を持たせる、看護学へのイメージをより現実的かつ具体的なものにする、など early exposure による学習効果が多く報告されている<sup>1)~5)</sup>。

本学においても 1 年次生を対象に、入学後 2 か月経過した 6 月に最初の基礎看護学実習である発達援助実践を実施している。この実習は、学内での学習も進行しておらず、未知の場所での実施でもあり、学生は緊張を抱えながらではあるが、看護の対象者や看護活動の姿をより現実的かつ具体的に理解するのに貢献している。

しかしながら今年は、4 月 7 日に発出された新型コ

ロナウイルス感染症発生に伴う緊急事態宣言を受けて、一実習施設が学生受入れ中止の対策を講じたこと、5 月中旬からの開講かつ分散登校となり学習進度の遅れが生じたこと、学生・対象者ともに感染の危険性が懸念されることなどから、学内実習へ振り替えざるを得ない状況となった。この対応は、文部科学省・厚生労働省からの事務連絡<sup>6)~8)</sup>において、新型コロナウイルス感染症の影響により、病院等の実習施設の代替が困難な場合には「実状を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えない」とされており、1 単位 45 時間を 30 時間に換算可能という特例措置に基づくものである。

このような経緯のもとに実施した学内実習を振り返ることによって、今年度の「発達援助実践」は、学生にどのような学びをもたらしたのか、教育内容を縮減することなく学びの保障につながっていたのかについて検討するとともに、不十分な点は何か、今後どのように補っていくのか、教育の在り方について一助を得ることを目的とする。

### 実習概要と分析方法

#### 1. 実習概要

今年度の対応を考えるにあたり、学生への学ぶ機会の提供と学びの保障は必須であるため、実習場所

と展開方法は変更するが、従来設定している実習の目的・目標や到達度は維持できるように努めることとした。また改めてこの実習では、看護の対象である人間の理解と、対象者の発達段階や生活に応じた関わりの理解は看護を学ぶ者として必要不可欠な学びと捉えた。さらに、前期は3密回避のためにグループディスカッションを制限していたので、感染症対策（健康状態確認・手洗い・マスク着用・フェイスシールド着用・周辺のアルコール消毒）の厳守を条件に、

グループ活動を取り入れることにした。

実習要領の概略は表1に示すとおりである。要領には、実習終了後の姿として 1) 看護の対象である人々の思いや反応を捉えることができる 2) あらゆる発達段階の人々にかかわることがわかり、各発達段階の特徴がイメージできる 3) 看護はさまざまな健康の段階にある人々を支援することがわかる の3項目を期待することも明記している。

表1. 発達援助実践 実習要領

#### 1. 実習目的

講義で学んだ看護の知識や技術を基本にして、地域社会で生活しているいろいろな発達段階にある健康を生きている人々とふれあい、その生活を知ることにより、人間の生活と健康の関わりについての理解を深める。

#### 2. 実習目標

- 1) 看護の対象は健康を生きる人間であることを理解する。
- 2) 人間の各ライフステージにおける特徴を理解する。
- 3) 看護の対象となる人間の生活と看護活動の実際を学ぶ。
- 4) 健康に影響を与える要因を、実践の場を通して対象をとりまく環境と関連させながら理解する。
- 5) この実践は、今後の看護実践への橋渡しとなり、今後の講義・演習・実践に向けての対象理解の一助となる。

#### 3. 実習期間・実習時間ならびに実習単位

実習時期：1年次 前期

実習単位：2単位（60時間）

実習期間：令和2年8月3日(月)～11日(月)

実習時間：9時00分～17時00分

#### 4. 実習場所

すべて学内で行う。使用教室は状況に応じて別途指示する。

#### 5. 展開方法

- 1) 本実践看護学の履修者を5～6名の8グループに分けて、学内実習を行う。
- 2) 実習にあたっては、必要なオリエンテーションを受ける。
- 3) 実習計画については、教員の指導に従う。
- 4) 実習にあたっては、既習の基礎知識や技術を活用する。
- 5) 活動はグループディスカッションを基本とする。

#### 6. カンファレンス

- 1) グループ毎のカンファレンスは必要に応じて行うが、3密回避のための感染症対策を厳守する。
- 2) 既習の学習内容や体験を基に「発達段階における特徴」や「発達段階に応じた生活支援」などをテーマに学びを整理する。
- 3) まとめのカンファレンスは、体験ごとにフィッシュボーンなど指示された用紙に整理し、発表を通してそれぞれの学びを共有する。

#### 7. 実習記録

- 1) 毎日の振り返り用紙：実習内容の振り返りに基づく学び、反省、感想
- 2) 終了レポート

体験を振り返りながら、求められたテーマについて、対象者の言動が何を意味するのか、自分はどう考えるのか、どのように対応していけばよいのかななどを考察する。

テーマ：「対象をとりまく環境と関連させて、健康に影響を与える要因を理解する」

提出期限：令和2年8月11日(月)17時

提出先：単位認定者の研究室

#### 8. 評価

評価は結果ではなく次の目標に向かうステップであるため、そのプロセスに対する評価とする。実習の目的・目標に照らして、実習内容・実習記録・実習態度・出席状況等について、総合的に評価する。

## 2. 分析方法

学生が提出した毎日の振り返り用紙および終了レポートから抽出された内容を分類・整理し、実習目標や期待する姿に到達できているかの観点から、今回の学びや教育効果を検討する。

## 3. 倫理的配慮

今年度の発達援助実践を振り返るにあたり、履修学生に同意を得た。目的や方法、自由意思による参加、情報の守秘および保管、プライバシーの保護、途中撤回の確保等を文書とともに口頭で説明した。説明は、実習評価を提出後1か月経過した時期に行い、承諾者は同意書に署名し、回収箱に投函する方法で同意を得た。

### 学内実習の実際

本実習では、看護の対象である人間の理解と、対象者の発達段階や生活に応じた関わりの理解は看護を学ぶ者として必要不可欠な学びと考え、学生が乳児期・幼児期・成人期（子育て中の母親）・老年期（前期高齢者と後期高齢者）にある人々に、性別に偏りなく関わられるように企画した。実習日程と内容は表2に示すとおりである。

### 1. 目安書の作成

各グループに来学いただく方々の簡単な情報を提示し、それぞれの発達段階の中から関わってみたい

人を選択してもらった。偏りがないように調整後、発達段階ごとに「目安書」を作成した。目安書は、ねらい、具体的な目標、観察項目、活動から学ぶ項目、必要物品、メンバーの役割分担で構成されている（図1参照）。この目安書作成にあたっては、既習の発達段階による身体的・精神的・社会的特徴や発達課題、認知発達に関する知識が必要であり、かつどのような活動が遊び心を誘い楽しい時間を創り出すかの工夫も求められた。

対象者の生年月日から年齢を割り出し、生きてきた社会背景や姿を想像してもらった。発達段階の特徴の理解を促進させるために、「戦争にまつわる思い出」「子育ての苦勞」「仕事をもつことの意味」「健康の秘訣」「子どもの歯磨き」など確認事項を各グループに2項目指示した。

### 2. お楽しみ企画の準備

目安書に基づいて、実施予定である足浴、人生ゲーム、謎解き脳トレ、マグネット作り等の活動の試作・試行を行い、過不足な点や不備な点について修正を行った。どのグループも実習3日目にはこの作業に入り、予想以上に時間を要したり、難しかったり、逆に簡単に終わってしまい予定時間をもてあますことが判明したりなど、見込みの甘さに気づき、目安書や活動内容の修正を行っていた。また、活動によって理解できる項目の見直しも行っていた。

表2. 実習の具体的な進め方

実習日	活 動	具体的内容
第1日	オリエンテーション 課題の説明 グループ発表	○実習目的・目標の意識づけ ○実習方法の理解 ○グループ作りの演習
第2日	「目安書作り」	○発達段階別にインタビュー内容や観察事項の抽出 ○目安書に基づくお楽しみ企画の準備
第3日	「目安書作り」	○発達段階別にインタビュー内容や観察事項の抽出 ○目安書に基づくお楽しみ企画の準備
第4日	「みんなが先生」 訪問計画に沿って対象者が控える教室を訪問して触れ合い、聞き取りや観察など企画を実施しながら学ぶ	○乳幼児期 / 4人 1歳女児2人、3～4歳男児2人 ○成人期 / 母親3人 ○高齢者 / 4人 前期高齢者男性2人 後期高齢者女性2人
第5日	目安書とフィッシュボーン図を用いた学びの整理	○発達段階別にインタビュー内容や観察事項の整理
第6日	「人間の発達と健康課題」 学びの共有と意見交換	○人間の一生を発達という観点で学びをまとめ直す ○グループごとにまとめた内容を発表し、共有する
第7日	レポート提出	○実習目標4の考察

## 発達援助実践の目安書

(オニ)グループメンバー:

対象者:

様 (年齢: 1 歳 6 カ月)


ねらい	<p>0 1 歳児の運動にまつわる発達の仕組みを理解すると同時に、言語機能と人への関わり方を観察する。</p>
具体的な目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ シールを見せるほど「手先バ」とのくらい使えるのかを見る。</li> <li>・ クレヨンなど「ハハハ」ものをつかんで、紙に書くかバあるのかを確認する。</li> <li>・ 発する言葉バ「ハハハ」と自分たには「ハハハ」言葉 (喃語) なのか、「マア」など単語の言葉なのか確認する。</li> </ul>
観察項目	<p>0 言語機能</p> <p>→ ・ 何をしたい、どこに行きたいという自分の意思をどのよう言葉や行動で表すか。</p> <p>0 人への関わり方</p> <p>→ ・ 家族以外の人 (学生、母親以外) に人見知りするか。</p> <p>・ 活動中の汗の有無 ・ おもちゃの使い方</p> <p>・ 活動項目への興味、姿勢</p> <p>・ 体の動き (活動か、手先の動き)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>0 新聞紙: やば がある</p> <p>0 絵あわせカード: 動物の認識</p> </div>
活動から学ぶ項目	<p>0 シールあそび</p> <p>→ シールを紙に見せて絵を完成させる。(手先を使えるか。)</p> <div style="text-align: center;">  <p>ははは 用紙におく → 紙にシールを貼り、絵を完成させる。</p> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p>0 積み木</p> <p>→ ブロックを積みあげる。</p> <p>(何個くらいのブロックを積みあげることを決めるのか。)</p> </div> <div style="width: 45%;"> <p>0 おんがき</p> <p>→ 自由に絵を書く。</p> <p>(⑤ とハ線など、どのよう絵を書けるのか。クレヨンを使えるか。)</p> </div> </div>
必要物品	<p>積み木、画用紙、うわ</p> <p>クレヨン、シール、紙皿、</p>
メンバーの役割分担	<p>1 歳児担当全員で行う。( )</p>

図1-1. 目安書作成の実際 (1)



発達援助実践の目安書	
(オンニ)グループ メンバー:	
対象者:	様 (年齢: 73 歳 月 日)
ねらい	老年期の方の1日の過ごし方を知り、運動機能、知覚機能、形態の変化を理解する。
具体的な目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インタビューの内容を理解し、受け答えできるかを観察する。</li> <li>・視力、聴力の低下はどの程度かを知る。</li> </ul>
観察項目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・直立姿勢を保っているか。→ 形態の変化を理解。</li> <li>・毛髪の様子</li> <li>・学生の発言、質問を1度で聴きとれているか。→ 聴力の低下を観察。</li> <li>・ネームを見せながら自己紹介をし、その時に目を細めるか、前傾姿勢になるかを観察する。→ 視力は低下しているか。</li> <li>・汗の有無</li> <li>・学生に対する反応の仕方 → /か/も/性格は?</li> </ul>
活動から学ぶ項目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トランプ(神経衰弱) → 記憶力はどのくらいか?</li> <li>・インタビュー { <ul style="list-style-type: none"> <li>・戦争に関わる記憶はどんなことだろう。(戦後の生活は?)</li> <li>・どのように1日過ごしているのだろう。</li> <li>・楽しみにしていることは何だろう。(趣味)</li> <li>・食事をする食っているか</li> </ul> </li> <li>・マッサージをする。 → マッサージに対する反応は?</li> <li>(肩甲骨) → 肩はこっているのか?</li> <li>・かるた → 瞬発力はどのくらいか。</li> <li>・結婚、子どもの有無</li> <li>・持病はありますか。</li> <li>・仕事はしているか、してほしかったか。</li> <li>・何人兄弟ですか。</li> </ul>
必要物品	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トランプ</li> <li>・かるた</li> </ul>
メンバーの役割分担	<ul style="list-style-type: none"> <li>・肩甲骨 → インタビュー → Xモ →</li> <li>・トランプ → みんは カルタ(読む人) →</li> </ul>

図1-2. 目安書作成の実際 (2)

### 3. みんなが先生

この試みは、2017年から始まったNPO法人ママの働き方応援隊による活動の一環である赤ちゃん先生プロジェクトにヒントを得た。このプロジェクトは、赤ちゃんと母親が教育機関や高齢者施設、企業、団体を訪問し学び・癒し・感動を共有してもらう教育プログラムである。従来は各々の発達段階の人々がいらっしゃる施設を学生が訪問するという実習形態であったが、今回は対象となる人々に来校いただき、交流する機会を作ることにした。来校いただく対象者からはもちろん一緒に交流する学生同志からも学ぶ時間になるだろうと考え、「みんなが先生」と題した。

この試みは、来校日を設定し、一緒に過ごす時間を通して、学生が目安書で立案した目標や内容を実施していくものである。対象者別に控室を準備し、その部屋を学生が訪問し、1時間過ごすという企画である。乳児期・幼児期・成人期（子育て中の母親）にある対象者の控室は同室とし、子どもたちが安全に活動でき、授乳や午睡や排泄の世話がしやすい和室にした。前期高齢者の男性2名は身体活動性に不自由がなかったため、くつろげるソファと集えるテーブル椅子がある進路支援課応接室を控室にした。後期高齢者の女性2名は杖歩行・車いす歩行だったので、高さのあるテーブル席を基本に考えて学生相談室を

控室にした。また、対象者の安全・安楽を守り、学生の企画や対応を支援する意味から各々の控室に教員を配置した。

学生は、対象者と話せるか、子どもたちと一緒に遊べるか、対象者が企画に応じてくれるか等の不安な気持ちを抱え緊張した面持ちであったが、実際に触れ合う時間が始まると、活き活きした表情や一緒に笑う姿が見受けられた。また、学生の思いを忖度せず興味の趣くままに行動する子どもの様子に困惑する学生もいた。実際の日程や学生の様子は表3、図2～図7のとおりである。

### 4. 人間の発達と健康課題のまとめ

実習の学びは、健康を生きる人間の7つの領域（①生命である、②環境と相互作用する、③生命と生活の過程である、④構造と機能である、⑤思いである、⑥生活行動である、⑦人間性のあらわれである）に沿って、関わった対象者の発達段階ごとにフィッシュボーン図を用いて整理した。触れ合いの時間を想起し、お互いのメモや文献を手がかりに、対象者の姿や思いを整理し、看護者としての関わり方を表現した（図8～図9参照）。グループごとに乳幼児期・成人期・前期高齢者・後期高齢者の4種のフィッシュボーン図が出来上がった。

表3. 「みんなが先生」のスケジュール

対象者 (控室)  時 間 帯	乳幼児期	成人期 / 母親	前期高齢者男性	後期高齢者女性	備 考
	1歳2か月女児 1歳6か月女児 3歳16日男児 4歳5か月男児 (礼法室)	29歳女性 37歳女性 40歳女性 (礼法室)	72歳男性 73歳男性 (進路支援室)	82歳女性 91歳女性 (学生相談室)	
9:00～9:30	(準備)	(準備)	(準備)	(準備)	
9:30～10:30	Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ	
10:30～10:45	(休憩)	(休憩)	(休憩)	(休憩)	
10:45～11:45	Bグループ	Cグループ	Dグループ	Aグループ	
11:45～13:00	(昼食+休憩)	(昼食+休憩)	(昼食+休憩)	(昼食+休憩)	学生食堂
13:00～14:00	Cグループ	Dグループ	Aグループ	Bグループ	
14:00～14:15	(休憩)	(休憩)	(休憩)	(休憩)	
14:15～15:15	Dグループ	Aグループ	Bグループ	Cグループ	
15:15～15:30	(休憩)	(休憩)	(休憩)	(休憩)	
担当教員	脇園		有松	山下	全般：山田

進め方：学生が4グループ（10名前後）に分かれて、控室を訪問する。

学生が準備した企画（インタビューや血圧測定や遊び等）を提案し、一緒に過ごす。

学生の控室・休憩室は、5-104教室と5-403教室とする。



図2



図3



図4



図5



図6



図7



図8



図9

## 5. グループ活動

お互いに助け合うという関係が人を成長させ、他者の理解につながると考え、5～6名のグループを構成した。

入学以来、感染症対策の一環として4人以上が集う活動を減じていたので、実習初日にグループ作りを意図して「エブリボディアップ」「BeingとFull value」のエクササイズ<sup>9)</sup>を実施した。「エブリボディアップ」は道具を必要としないイニシアティブで、①手がつながっていて、②足がつながっていて、③おしりが床についた状態で、④みんなが一度に立ち上がるというものである。手を握ったり、タイミングを合わせたり、誰かのアイデアがヒントになったりする中で一体感を得やすいと考えた。また成功体験は和やかな雰囲気とグループの結束を生み出すと考えた。グループの名前も話し合って決めた。「BeingとFull value」は、グループを表現するポーズを決めて、その姿をトレースした用紙にグループが考える価値ある行動を書き込んでいくものである。人型の内側に“一人ひとりが安心して活動に臨むために必要だと思うこと”，外側には“このことがあると安心して活動に臨めないこと”を記し、メンバーに説明して同意が得られれば人型の内側にサインをした。この方法は、まずは思ったことを書いてしまうということでリラックスした状態から進めることができる。そして、書いたことに対してみんなで確認し合い、きちんと理解して書かれたことに責任を持とう、という雰囲気が生まれる。これらのエクササイズでグループ活動を進める際のルールが作られた。

2日目以降はすべてグループ活動で実施した。日を重ねるにつれて、さまざまな活動の共通体験とグループに起きた出来事により、グループは少しずつ変化していった。活動そのものがグループや個人に影響を与えることもあれば、メンバーとの関わりの中で仲間から影響を受けたり、自分自身が仲間に影響を与えたりしながら、グループと個人は変化・成長していった。意見の相違や、妥協案が見つからず再度話し合うという体験などからグループとしての方向性が固まり、課題に集中していく姿が伺えた。チャレンジする楽しさ、喜び、満足感を分かち合い、仮にチャレンジが失敗に終わっても、その過程の中から次への学びを見つけていた。

### 学内実習での成果

#### 1. 目安書作成とお楽しみ企画

2日間にわたり目安書作成とお楽しみ企画に取り組んでもらったが、振り返り用紙には以下のような記述あった。

- ・教科書や講義資料を基に発達段階各期の特徴を洗い出し、何をするかを考えた
- ・3歳児はケンケンが出来るかを確認するために大きめの円を作り、自分たちが手本を示せるよう準備した
- ・メンバーそれぞれで1歳児の特徴の捉えが異なっていたので、納得できるまで調べ直し、イメージの統一を図った
- ・幼い妹や祖父母が教えてくれた遊びなどを思い出し、お楽しみ企画に活かした
- ・年齢に合う企画なのか、その人はできるのか、もう少しいろいろな観点から考えたい
- ・自分で教科書や本を探し、みんなと共に考えを出すことができた
- ・自分には企画を発想する力が足りない。何を知らたいのか明確にして考える必要がある
- ・成人期の方にはストレス解消となることをしたいという考えがあったが、具体的な案がなかなか見つからなかった。人生ゲームという提案に助けられた
- ・成人期と老年期の方にすすめる予定のクロスワードを実際に解き、難易度を確認していたのは相手の目線に立つという意味で良い
- ・認知機能や身体機能などバラバラに観察する企画を考えるのではなく、一つの企画をすることで沢山の観点から観察できることを探せるようになりたい

#### 2. 「みんなが先生」による発達段階の理解

学生一人一人に、発達段階別に、理解できたことや想像と異なったことを振り返りとして整理してもらった(表4参照)。また学生の感想は、以下のとおりであった。

- ・普段は関わることのない年齢層と話したり、どう質問すればよいか考える時間を持てたことが勉強になった
- ・「来てよかった」「嬉しい」「楽しい」と言って握手を求めて頂けたことが、企画を一生懸命考えてよかったという充実感になった
- ・初めていろいろな境遇の方と関わり、変化についていくのが大変だったが、それ以上に充実感や人に関わる喜びを感じた
- ・1歳児が想像以上に人見知りをして母親から離れず、どうしたら早く慣れてくれるのか、玩具に興味を示してくれるのか、工夫しながら接するのが大変難しかった
- ・一番安心していただけたはずの乳幼児期の対応に一番苦慮した。子ども特有のわがまま(?)についていけず意気消沈した



- ・乳幼児期の言葉で表せない感情や思い、考えを読み取ることに一番苦労した
- ・老年期や成人期にある人との関りが一番心配だったが、想像に反して一番スムーズだった
- ・乳幼児期～高齢者までの方と関わってみて、発達の状況や発達課題、性格、経験、生活、考え方、価値観など本当に人それぞれなのだと実感できた
- ・人と関わるということは思っていた以上に頭も身体も使い大変で難しかったが、それ以上に人に関わる楽しさを実感できた
- ・教科書で学んだとおりではなく、各発達段階の中でも個人差はあるのだと学んだ。一人の人間、個人としての看護の提供の重要性を感じた
- ・コミュニケーションの難しさ、伝えることの難しさ、接し方の難しさなど自分に足りない部分があると実感した
- ・老年期の方が昔の楽しかったことを話されている時に笑顔になった場面で、自分たちもとても穏やかな気持ちになった。子どもたちが一緒に遊んで笑ってくれたり、抱きついたりしてくれると、場が明るくなった
- ・1時間は開始前は長いと思っていたが、実際はあっという間に過ぎて短く感じた
- ・想像していた発達の程度が違っていることが多く、驚きと共に個別性を肌で感じた
- ・子どもは手作りするものが動いたり、飛んだり、音が鳴ったりするものに興味があるのだと気づいた

### 3. グループ活動

本実習では自分の力と他者の力に気づく意味で、すべてグループ活動を基本とした。以下のような学生の気づきが得られた。

- ・今回、初めて同じメンバーと長く活動した。最初は不安もあったが、徐々に言いたいこともしっかり言えるようになり、チームワークが高まっていると実感した
- ・目安書作りでメンバーの意見が違うこともあり、グループ活動の難しさも感じた
- ・計画通りにいかないことが多くあったが、計画があったからこそ沢山の工夫ができた。「計画する」ことの大切さに改めて気づかされた
- ・準備したことに皆さんが嬉しそうな反応を示してくれたので、グループ全員で準備を丁寧に行ってきた良かったと思った。
- ・計画通りにいかないことが多くあったので、準備・計画の段階で皆でいろいろなパターンを考えて確認しておくべきだった
- ・グループ活動を通して、新しい考えが生まれたり、協力の大切さや達成感を強く感じた
- ・大学生になって初めてのグループ活動で、友人との会話が aumentata
- ・グループの中で自分の立ち位置や役割を見い出せずにいたが、自分の拙い発言にも共感してくれたり話を広げてくれたので、団結して課題に取り組めた
- ・メンバーの学ぼうとする姿勢や積極的に話しかけている姿、相槌をうつ姿が凄いと思った
- ・メンバーが対象者に丁寧に説明する姿を見て、自分には足りないことを実感した
- ・沈黙になりそうな時や質問のタイミングに困っていた時に話題提供してくれたメンバーに助けられた
- ・話を聞く人、メモを取る人と自然に役割分担ができて、みんなで成長できた
- ・相手に気を遣わせる場面があったので、メンバーにもっとはきはき話し、質問するべきと言いたい

### 4. その他

#### 1) 教員

- ・人の懐に入ることの難しさや、話を聞き出すことの難しさ、子どもと触れ合うことの難しさを改めて実感でき、先生たちの凄さを感じた
- ・乳幼児期の子どもとの接し方が始めは上手いかなかったが、先生方の声のかけ方など見ていて参考となり、先生方のコミュニケーション力を実感した

#### 2) 実習

- ・初めての实習だったが、思っていたよりも実習は何倍も吸収することが多くあると感じた。看護を学ぶ上で、最も重要で基礎的なことを学ぶことができて何よりも嬉しい
- ・教科書だけの学びが実際に五感で触れることで具体化され、これからの活力になった
- ・自分が伝えたいことを相手にうまく伝えることは難しい
- ・実習ではその場の判断や切り換え、柔軟な対応が大切であることを改めて理解できた
- ・やってみないと分からないものが沢山あると感じた
- ・年代に合わせて働きかける声かけの技術を身につけなければならないと強く感じた
- ・フェイスシールドやマスクによって伝わりにくさが増すので、声を大きくゆっくり話す必要がある
- ・教科書だけでは客観的に学ぶという感じだったが、今回は主体的に各発達段階の特徴やその人の特徴を学ぶことができた実感する
- ・人に接する際に、先入観や思い込み、年齢からの勝手な想像はあまり良くないと感じた

表4. 実習における発達段階別の学び

発達段階	学んだこと・理解したこと	出会う前の想像と異なったこと
1 歳代の乳幼児 (女児)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・度々転倒するが、かなり歩くことができる</li> <li>・積み木を持ったり、置いたりできる</li> <li>・音が鳴るものを好む</li> <li>・一人遊びが基本で、音楽に合わせて体を動かしたり、音を鳴らしたりする</li> <li>・感情が表情に表される ・分離不安がある</li> <li>・初対面でも人の顔をよく見る</li> <li>・母親の傍にいたい ・姿が見えないと探す</li> <li>・乳幼児にとって母親は「重要他者」である</li> <li>・怒った時は言葉にならない声を発する</li> <li>・興味をもったものは手で触る</li> <li>・一日の中で昼寝の時間が必要である（昼食後）</li> <li>・腹式呼吸である ・体温が高く、発汗が多い</li> <li>・菓子を指でつまむことができる</li> <li>・単語を話すことができる（ママ、ワンワン）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・短距離のよちよち歩きを想像したが、独り歩行ができたり走ったりしていた</li> <li>・自由に走り回る ・好奇心旺盛</li> <li>・想像していたよりも泣かなかった</li> <li>・パイプ椅子をよじ登ることができた</li> <li>・初めての人でも視界に入れば反応を示す</li> <li>・遊びに夢中になると母親の元には戻らない</li> <li>・想像以上に母親に依存している</li> <li>・固めの菓子（ビスケット）も食べる</li> <li>・クレヨンを箱から出し、また一列に並べ戻していた</li> <li>・名前を呼ぶと返事すると思っていた</li> <li>・泣き止まない姿に困った</li> </ul>
3 ～ 4 歳代の幼児 (男児)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・単語によって気持ちを表現する</li> <li>・遊び相手が沢山いると嬉しくて楽しい</li> <li>・興味のないことには集中力が散漫になる</li> <li>・作ったり描いたりすると母親に見せたいくなる</li> <li>・3 歳 4 歳でも性格や個性がはっきり出る</li> <li>・足をぶつけて泣きそうになっても我慢できる</li> <li>・音や他人のしている事に興味を持つ</li> <li>・自分を気にかけてもらえるような行動をとる</li> <li>・動くことが好き ・両足でジャンプできる</li> <li>・色や形の識別ができ、質問すると言葉で返す</li> <li>・キャッチボールができる ・手洗いができる</li> <li>・15 まで数えることができる ・靴をはける</li> <li>・妹には負けないようにと対抗心がある</li> <li>・乳幼児よりも周りの人と遊ぶ力がある</li> <li>・遊びのルールを理解できる</li> <li>・周りの人の行動や表情をよく見ている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・たくさんのおしゃべりを予想したが、意外と会話が少ない</li> <li>・やりたい / やりたくないなど自分の意思をはっきり伝える</li> <li>・好きな事物への集中力は高い</li> <li>・単語やジェスチャーで意思を伝える</li> <li>・一緒に遊ぶうちに話ができるようになり、手を握ってくれるようになる</li> <li>・母親が近くにいると安心している</li> <li>・片足飛びができない ・字は読めない</li> <li>・妹を世話する様子から自分より年齢の低い者に対して優しい気持ちがある</li> <li>・虫や乗り物の名前を知っていた</li> <li>・鋏を片手で扱い、ストローを切る</li> <li>・絵本を一緒に見ている時、質問される</li> <li>・まだおむつをしていた</li> </ul>
成人期にある人 (母親)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身体的には急激な変化はみられない</li> <li>・子ども中心の生活になる</li> <li>・子どもへの影響を考えて「ストレスがたまらない程度に適当にやる」工夫をしている</li> <li>・家事の負担軽減にお掃除ロボットを活用する</li> <li>・子どもの様子を常に気にしている</li> <li>・子どもを怒る時はあっても可愛いと思う</li> <li>・子どもの存在は食生活や生活習慣に影響する</li> <li>・結婚や育児の過程の中で環境が大きく変わり、その状況変化に対応しながら生活している</li> <li>・出産や育児を経験し、自分の命より大切なものを見つけている</li> <li>・両親から自立し、自分の生活を送っている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の時間が欲しいや大変という話を予想したが、前向きな発言だった</li> <li>・子どもとの接し方、教育のモットーや家事の工夫を考えている</li> <li>・睡眠不足で疲れていると思ったが、常に笑顔だった</li> <li>・夫は協力的で不満はない</li> <li>・身なりを整えておしゃれだった</li> <li>・妊娠や出産で身体を壊すこともある</li> <li>・子育て以外にも自分の人生目標を明確に持っていた</li> </ul>

70 歳代の 前期高齢者 (男性)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高音が聞き取りにくい、爪が黒っぽい、白髪、しみやしわ等老年期の身体的特徴が表れていた</li> <li>・老化現象のみならず、手術の後遺症や生活習慣病などその人に複数の特徴がある</li> <li>・認知症の言葉に敏感で、健康保持のための工夫をしている</li> <li>・経験豊富で話題が幅広い</li> <li>・退職後も任された役割があることは喜び</li> <li>・地域の行事やボランティア活動に参加し、人とのつながりを大事にしている</li> <li>・昔の話をする時、楽しそうで生き生きしている</li> <li>・人生経験から自分の信念や考え方が明確であり、それに基づいて生活している</li> <li>・学生の自分たちと生活や考えに違いがある</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・想像以上に若々しくて活動的で元気</li> <li>・日焼けしており、肌にハリがある</li> <li>・背筋がまっすぐしている</li> <li>・身体機能の低下はあるが、スポーツをしている</li> <li>・「死」に対する恐怖があるからこそ自分の死に方の理想を持っている</li> <li>・精神面では「まだ高齢者ではない」の思いが強い</li> <li>・方言が強くないのは県外で過ごした経験による</li> <li>・できることを見つけ社会貢献し続けている</li> </ul>
80 ～ 90 歳代の 後期高齢者 (女性)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・皮膚の乾燥やしわ等見てわかる特徴がある</li> <li>・手の震えはなかった ・口渇がみられる</li> <li>・身体的な変化は 70 歳代よりも多く見られた</li> <li>・聴力の低下など様々な機能低下がありながらもできること・やりたいことを楽しんでいる</li> <li>・人と会うことを意識するからこそ化粧して身なりを整えて外出する行動になる</li> <li>・相手のペースに合わせて、ゆっくりと大きな声で話すことが必要である</li> <li>・趣味やデイサービスの友人が大切になったり、生きがいになる</li> <li>・蛋白質不足を意識して食生活に気をつけたり、むくみ解消のトレーニングを取り入れたり、自分に合った工夫をしていた</li> <li>・その人が考える「健康」に基づき生活している</li> <li>・家族に迷惑をかけたくない、施設に入りたくないと思っている</li> <li>・周りに頼りすぎず、できることは自分でやりたいと思っている</li> <li>・気持ちの持ち方や性格が与える影響が大きい時期である</li> <li>・「生きる」ことの大切さを生活の過程で感じ、毎日を大切に生きていच्छやる</li> <li>・向上心があり、知識や経験が豊富である</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・認知症対策が必須ではなく、新しい事に挑戦したり、趣味を楽しんでいる</li> <li>・知識が豊富である</li> <li>・話す口調がしっかりしている</li> <li>・スマートフォンや便利な物を受け入れている</li> <li>・年齢から認知機能の低下があると考えるのは大変失礼である</li> <li>・コミュニケーション能力は高い</li> <li>・若い人への期待する気持ちがある</li> <li>・杖 1 本と自分の力で歩ける</li> <li>・声が出しにくそうだった</li> <li>・昔のことを明確に覚えている</li> <li>・予想以上にハキハキ話し、ゲームにテンポよく反応する姿に驚いた</li> <li>・表情豊かで話すのが楽しそうな様子</li> <li>・想像以上に腰が曲がっている</li> </ul>



## 考 察

本来、この実習の目的は、講義で学んだ看護の知識や技術を基本に、地域社会で生活しているいろいろな発達段階にある健康を生活している人々とふれあい、その生活を知ることによって、人間の生活と健康の関わりについての理解を深めることである。実習終了後の学生の姿として、1. 看護の対象である人々の思いや反応を捉えることができる 2. あらゆる発達段階の人々にかかわることがわかり各発達段階の特徴がイメージできる 3. 看護はさまざまな健康の段階にある人々を支援することがわかる の3項目を期待している。今年度は諸事情により学内実習に変更し、看護の対象である人間の理解と、対象者の発達段階や生活に応じた関わり方の理解に重点を置く実習となった。今回の実習は、学生にどのような学びをもたらしたのか、教育内容を縮減することなく学びの保障につながっていたのかについて、まずは期待する姿の観点から検討を試みる。

### 1. 人々の思いや反応を捉える

企画「みんなが先生」の学生の感想をみると、対象者は乳幼児期～老年期の世代と多岐にわたり、生きてきた背景や境遇の異なる方々との関わりは容易ではなかったことが伺える。相手の反応に合わせた対応や、言葉で表せない感情や思い・考えの読み取りに苦慮したことも伝わってくる。一方で、人に関わる喜びや充実感も得ており、発達の状況や発達課題、性格、経験、生活、考え方、価値観など本当に人それぞれなのだと実感している。

かつては、日常生活の中で多様な世代の人々と言葉を交わし自然な交流が可能であった。しかし、少子高齢化、核家族化等の現象によって、世代間でのコミュニケーションを行う機会が減少している。また、ICTの利活用が広がっており、若者層ではLINEなどのメッセージアプリが頻繁に利用されるコミュニケーション手段となっている。若者が利用するLINEやインスタグラムは感情や気分を絵文字や写真で表現することが多く、世代間共通の語彙の減少と、語彙の曖昧な概念化をもたらし、ますます世代間コミュニケーションを困難にしている。長谷川<sup>10)</sup>は3割の学生がコミュニケーションの困難さを挙げていると指摘し、高野<sup>11)</sup>の研究では高齢者の使う言葉がわからず、話の理解ができなくなった経験のある学生は7割いるという。「患者が何を伝えようとしているか解読できないことは、看護学生のネガティブ情動とコミュニケーションの困難感を高める」と阿部<sup>12)</sup>が指摘するように、対象者がどのように反応し、どのような思いを抱えているかをキャッチできた成功体験は、対象者への関心を高め、言語的・非言語的表

現を適切に受け止めて双方向性のコミュニケーションを成立させる要因になる。反応や思いを捉える力は看護者には必須であり、重要である。今回は対象者に恵まれ、学生が考えた足浴や人生ゲーム、謎解き脳トレ、マグネット作り等の企画に快く応じてくださり、「来てよかった」「嬉しい」「楽しい」などの肯定的発言や笑顔、握手やハグといった対象者の反応が学生に人と関わる喜びや充実感をもたらしたと考えられる。

また、益子<sup>13)</sup>は看護に求められるコミュニケーション能力の一つである相手に関心をもつことはその人の言動をよく観察し、ニーズの把握につながると述べている。具体的な目標、観察や活動から学ぶ項目等で構成された目安書作成は、既習の発達段階による身体的・精神的・社会的特徴や発達課題、認知発達に関する知識の整理のみならず、遊び心を誘う楽しい時間創出の工夫が会合の予定の対象者への関心を高め、観察行動へとつながったと考えられる。

看護は健康課題をもつ人間に注目する。ナイチンゲール<sup>14)</sup>が「病気の看護ではない。病人の看護である」と述べているように、その人が生活する者として、その健康課題にどのように反応しているかをみるのである。加えて、全体を代表するのはその人のそのときの思いであることから、看護は思いのうえの反応（その人の思いを占めているかわかりごと）をとくに重視する。生活者としての人々が健康課題に出あって示す反応を判別し、人々がそれに対処するのを健康の方向に進むよう援助すること、とくにその人の思いを大切に援助することが看護の概念である。ゆえに、人々の反応や思いを捉えることは看護の提供の基盤となる能力であると言える。

さらに今回はすべてグループ活動を基本とした。学生は当初、グループにおける自分の立ち位置や役割を見い出せず不安な気持ちもあったが、目安書作成や企画の実施等の活動を行うにつれて自分の意見を述べたり、メンバーの提案を受け入れたりできるようになった。グループ活動は、学生対学生という情報経路を持つことにその特色があり、学生間の相互作用を重視した学習形態である。助け合ったり、頼りにされる体験は、自分という存在の肯定や共感的理解を生み出すとともに、対立や矛盾する意見によって、学生は今までの自分の考えを変えたり発展させることができる。学生の感想にも示されるように、グループ活動の難しさを感じつつも、発想の広がりを体験し、メンバーの姿勢から自分の傾向や課題を発見していた。他者と出会うことで自分を知り、自分の力と他者の力に気づいていた。

対象者との出会いやグループ活動を通して、人そ

れぞれに経験や生活、考え方、価値観などが異なるという気づきは、看護の対象者は生活する主体であり、個別性・多様性があるという理解につながる。また、一人一人が別個の存在であり、人間は唯一無二の存在であることの理解につながる。人間は理解しあえない存在であるという前提に立って、人々の反応や思いを捉え、他者を理解することが重要である。

## 2. 発達段階の特徴がイメージできる

今回の実習で学生が出会った人々は、乳幼児期と成人期、老年期（前期および後期高齢者）であった。学生は、わずか1日でそれぞれの対象者と接する時間は1時間という限定された状況で、各発達段階の特徴を把握しなければならなかった。グループで協力し合いながら理解できた特徴は表4のとおりであるが、5つの期の身体的・精神的・社会的特徴はおおよそ汲み取ることができていると考えられる。

松木<sup>15)</sup>は人間を「生命過程は時空の継続性に従って一方向に進化していく」という前提で捉える。どの人も多少の個人差はあっても、環境と相互作用しながら成長・発達し、最後には死を迎える。人は生から死につながる生命体としての存在であり、同時に生活を営む統合体として精神・社会的存在であるといえる。基本的生活習慣を獲得していく途上にある乳幼児をはじめ、社会で生産的な仕事に従事しながら子どもを育てるという自己を保持しつつ自己を制限する親世代、心身の老化を受け入れつつ自分の人生を統合し受容していく高齢者との交流を通して、まさに人間は生命と生活の過程であり、人間の成長・発達や統合体としての人間を実感できたのではないかと考えられる。

看護者が看護の対象である人間をどのように理解しているかは、その看護活動に大きく影響を与える。人間は発達段階や職業等により共通点があるため、その共通性や特徴を知っておくことは対象者の理解を容易にする一方、同じ年齢でも成長・発達の程度が異なったり、それぞれの性格があり、個別性がある。看護は人間をみるのであるから、看護の提供にあたって看護者は対象者の個別性を大切にしなければならない。発達段階別の学びをみると、対象者と接する際に、先入観や勝手な思い込み・想像は避けなければならないことも学んでいた。

## 3. さまざまな健康段階にある人々を援助する

健康はホリスティックな概念であり、基本的人権の1つである。WHOの健康の定義に“最高水準”という表現があることから、健康にはさまざまなレベルがあることが考えられる。

また、健康と疾病の状態は連続体である。人はそ

れぞれ連続体上のどこかに位置しているといえる。さらに健康は概念であると同時に、現実の事象でもある。人々は“健康的に暮らし”たり、“健康を損ね”たり、“健康課題をかかえ”ていたりする。

今回は、手術の後遺症や生活習慣病などを抱えながらも比較的健康の水準を保ち、自分が暮らす地域で生活している人々を対象とした。従来であれば実習施設に赴き、病弱や病気の段階にある人々を援助する、健康を取り戻す援助をする、自宅で看護を提供するという体験ができていたが、今年度は実施できなかった。さまざまな健康段階にある人々を援助するという課題は、今後の授業でもひき続き解説していくとともに、2年次以降に予定されている病院実習や地域看護実習の学修に期待したい。

以上のことから、学生の学びが明確になった。実習目標である1)看護の対象は健康を生きる人間であること、2)人間の各ライフステージにおける特徴、4)健康に影響を与える要因、5)今後の講義・演習・実践に向けての対象理解、の4点については目標到達ができたと考えられる。しかし、目標3)対象者の生活と看護活動の実際を学ぶについては、健康レベルに応じた看護活動の実際やさまざまな看護活動の場の理解を深める体験は学内実習に組み込むことができず、今後の課題として残った。

学生の多くは、看護学実習で、初めて看護がわかったと表現する。これはばらばらに知覚し、理解していた知識と技能が、生活する人々に働きかける体験を通して、選び出され、技術となってまとめられ、同時に看護行為が看護を必要とする人々にとって、どのような意味を持つのがわかり始めることによる手ごたえが、学生たちに体得した実感を与えるからと考えられる。看護学実習は、実際に五感で触れることで教科書や文献上の知識を具体化させ、主体的な学びに変えていく。どのような状況下にあっても私たち教員は学びの場の創造と実現に努め、学生の変化・成長を支援していきたい。

## 謝 辞

本稿をまとめるにあたり、貴重な時間を割き「みんなが先生」にご参加くださった皆様、実習記録や学びの記録等を快く提供してくださった学生の皆様、有形無形に実習を支えてくださった皆様に深く感謝申し上げます。写真掲載についても快く同意いただき重ねて御礼申し上げます。

## 利益相反

本稿をまとめるにあたり、利益相反に相当する事項はない。

## 文 献

- 1) 相撲佐希子：1年次前期の基礎看護学実習が初期学生の「学び」と職業に対する「思い」に及ぼす影響。日本赤十字看護学会誌 16 (1)：41-46, 2016
- 2) 岡田郁子, 山口さつき, 泉澤真紀：基礎看護学実習Ⅰ実施前後における看護大学1年生の向社会的行動の変化。旭川大学保健福祉学部研究紀要 9：13-19, 2017
- 3) 阿部テル子, 工藤千賀子, 渡部菜穂子, 後藤芙優子：基礎看護学実習における学生の対受持患者コミュニケーション展開－学生と患者の言語的・非言語的表現とその受け止め方の分析から。弘前学院大学看護紀要 12：13-25, 2017
- 4) 岡田拓也, 田邊三千世, 阿部祥子, 矢野奈々子, 山田典子, 佐藤順子, 大貫直子：4年制看護基礎教育の基礎看護学における看護の対象と場を知る実習の学び－入学3ヵ月後の学生が考える地域で生活している人を知る意義。神奈川県立平塚看護大学校紀要 1：10-13, 2019
- 5) 鶴田晴美：基礎看護学実習において患者－学生間の良好な人間関係が気づけたと感じた場面と学生の気持ち。日本看護学教育学会誌 29 (3)：29-41, 2020
- 6) 文部科学省初等中等教育局他：「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」事務連絡。令和2年2月28日
- 7) 文部科学省初等中等教育局他：「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」事務連絡。令和2年6月1日
- 8) 文部科学省高等教育局医学教育課：「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師等養成所における臨地実習の取り扱いについて（周知）」事務連絡。令和2年6月23日
- 9) プロジェクトアドベンチャーJapan：グループの力を生かす：成長を支えるグループづくり：プロジェクトアドベンチャー入門。みくに出版, 東京, 2005
- 10) 長谷川真美：看護基礎教育におけるコミュニケーション力の育成に関する研究－基礎看護学実習で印象に残ったとする場面からの分析。東都医療大学紀要 7 (1)：39-51, 2017
- 11) 高野真由美：看護学生と高齢者との世代差言語とコミュニケーションへの影響。日本看護学教育学会誌 30(2)：49-59, 2020
- 12) 阿部智美：患者とのコミュニケーション困難場面における看護学生の「解説, 問題解決, 感情」との関連。日本看護研究学会誌 36 (1)：149-156, 2013
- 13) 益子育代：看護におけるコミュニケーションに求められる能力。臨床看護 34 (12)：1684-1703, 2008
- 14) F.Nightingale (湯楨ます他訳)：看護覚え書。第7版, 現代社, 東京, 2019
- 15) 松木光子：看護学概論。第5版, ヌーヴェルヒロカワ, 東京, 2011
- 16) 安酸史子：臨地実習の代替策を考えるうえで必要なこと。看護展望 45(13)：10-14, 2020
- 17) 中原るり子, 櫻井美奈, 中村昌子, 山住理恵, 竹安晶子, 畑山律子：2020年度共立女子大学看護学部基礎看護学実習Ⅰの実践報告。看護展望 45 (13)：28-33, 2020